月刊民放 2010 5 May

# 目次

## 特集 バラエティーなう


4 ●私は、バラエティー番組□ます。
～作りたいバラエティー、見たいバラエティー～
民放連・放送基準審議会主催「バラエティー向上委員会」から

16 ●テレビ・バラエティーはどこへ行く？ 西条　昇

20 ●〈お笑い〉の未来はいつだって明るい！ 高橋　洋二

24 ●BPO意見書はどう受けとめられたか 編　集　部


Cover Design : Kimio Okamura

特集 バラエティーなう

# 私は、バラエティー番組［　　］ます。

## ～作りたいバラエティー、見たいバラエティー～

民放連・放送基準審議会主催「バラエティー向上委員会」から

「バラエティー向上委員会」と題するシンポジウムが、2010年3月11日に東京・赤坂の草月ホールで開催された。昨年11月に放送倫理・番組向上機構（BPO）の放送倫理検証委員会が発表した「最近のテレビ・バラエティー番組に関する意見」で、視聴者と制作者が語り合うシンポジウム等の開催が提言されたことも受け、民放連・放送基準審議会（議長＝山本雅弘・毎日放送会長、当時）が開催したものだ。

ステージ壇上には、在京5社の代表的なバラエティー番組の制作者50人が勢揃い、壇上から少し離れた上手側にBPO・放送倫理検証委員会の吉岡忍、水島久光の両委員が並んだ。フロアには、視聴者50人のほか、放送関係者らが集まった。司会は、福井謙二（フジテレビ）、大江麻理子（テレビ東京）の両アナウンサー。壇上の制作者に随時質問を投げかけ、集計結果を電光掲示板に表示しながら進行した。

**福井**　さあ、それでは、答えにくい質問も、たびたび飛び出してくると思います。そういうことも想定して、トータライザーを用意しました。ちょっとテストも兼ねて、質問をさせていただきます。

**大江**　そもそも、この「バラエティー向上委員会」は、BPOの意見書を受けて開かれることになったわけですが、この意見書を読んだという方、スイッチをお願いします。

**福井**　おっと、50人中48人。2人が読んでいないという……。

**大江**　では、読んでみて、「勇気づけられた」という方、スイッチをお願いします。

……48人中16人。

では、この意見書を「正直うっとうしい」と思った方、スイッチオン！

**福井**　うっとうしいと思った方が22人。

**大江**　今日は、本音がばんばん出てきそうな予感がしますね。

### バラエティーはやりにくい？

**福井**　こういった数字も踏まえ、各論に移ってまいりましょう。まずは「バラエティーの現在」という話題から始めていこうと思います。

**大江**　今、バラエティー番組が「正直やりにくい」と思っている方は、スイッチオン。

……50人中32人の方が、「やりにくい」と思っているということで、これは大半といってもよろしいですね。

**福井**　そうですね。そうすると皆さんは、これまでどんな瞬間に、やりにくさを実感されたのでしょうか。このあたりから探ってまい

りたいと思います。

**大江**　それでは質問です。BPOに呼ばれて、事情を聞かれたことがあるという方、スイッチオン、お願いします。

**福井**　2人ですか……もう、こうなりますと、このお2人から口火を切っていただくことになりますが、正直に挙手をお願いいたします。

**中嶋優一（フジテレビ）**　『めちゃ2イケてるッ！』のプロデューサーを担当しています。昨年の夏ごろ呼ばれました。もともとは同じ年の2月ごろにホンコンさんの顔にビニール袋をかけるという企画や、5月ごろハリセンボンの近藤春菜さんを、鳥居みゆきさんがたびたびイジメているんじゃないか。それを繰り返しているのは、どうなのか――というご意見がBPOに寄せられ、青少年委員会に出向いてお話をする機会がありました。

どうしてそんな企画に至ったのかという聴取もありましたが、委員の皆さんはテレビの制作者とほとんど話をしたことがないということから、「実際に普段、どういう思いでお笑いの番組を作っているのか」といったことを、いろいろ興味深く聞かれました。僕も自分の意見を本音で言えて良かったと思います。要は、何の議論もなく、半ば強制的にこれはダメだと決めつけられるよりは、申し開きのできる場所や機会があった方がいいなと感じました。今後も、そのような機会があれば、どんどん出向いていきたいと思います。

**吉岡**　BPOには3つの委員会があります。「青少年委員会」と「放送人権委員会」があり、今回バラエティー番組の問題について意見を出したのは「放送倫理検証委員会」です。このバラエティー番組の意見書の作成にあたっては、現場の方々の話は、直接うかがってはいません。

**福井**　水島さん、最近のバラエティー番組に関して印象に残っているクレームなどはございますか？

**水島**　これという特定の意見よりも、多様なクレームが上がってくる、その量の多さに注目したというのが今回の意見書の大前提です。個別の意見よりは、全体の量を問題にしたということですね。

## 罰ゲームのリスクと限界

**福井**　最近、罰ゲームなどもかなり目につくようですが、罰ゲームなどをやりすぎて、自分のコーナーが終わってしまったという方、ボタンをお願いします。

**大江**　あ、お1人いらっしゃいますね。

**中嶋（フジテレビ）**　ちょうど10年前ですが『めちゃ2イケてるッ！』に「しりとり侍」という人気コーナーがありました。出演者がしりとりのようなゲームをやり、負けてしまった人は、柔らかい棒を持った10人ほどの野武士ふうのお侍さんたちに、その棒で叩かれる、という罰ゲームです。それが、「1人を集団でイジメているのではないか」という批判が高まり、全く議論というか、反論の機会もないまま、会社の上層部の決定でコーナー

2010年3月11日　東京・草月ホール

をやめることになってしまいました。

当時、「そんなに子どもがまねをするかなぁ」という思いもあり、もちろん一生懸命作っていたので、遺憾な気持ちもありました。ただ、その後、同じようなゲームを企画する時に、単にイジメに見えるようなものだけではなく、罰ゲームにスポーツ性を持たせるなど、いろいろ考えるきっかけになりました。ひょっとすると、勝てるチャンスがある罰ゲームを考案できたという点で、視聴者の方にも楽しんでいただけるものが作れるようになったのかとも思っています。

**福井**　今の罰ゲームに関して、あるいは大方の罰ゲームに関して、限度というラインをどのあたりに引けばよろしいんでしょうか。

**吉岡**　本当に難しいですよ。限度というより、たぶん納得性だと思う。もう1つは、やっぱり「この人がやっている」という、人のキャラクターと、その行為がうまく合っていて、この人だったら、悪気じゃないなってことが分かるような演出だとか……。同じことをやっても、ある人がやるとイジメになるけど、僕がやるとイジメにならないとか。そういうことが大事なんじゃないか。

**水島**　要するに、番組全体には文脈がある。ちゃんと見てくださる視聴者ばかりなら、それほどリスクは大きくないと思うんですよ。ところが、番組全体を楽しんでいないところで、ある部分だけを切り取って見たときに、ものすごくリスクが高くなるわけですね。つまり番組を楽しめない人の存在を、ちょっと頭の中に置いておく必要があるのではないか。

**福井**　今、イジメとか罰ゲームというキーワードが出てきましたが、ちょっとこちらを聞いていただけますでしょうか。

**大江**　では、各局の皆さんにお聞きしましょう。今、禁止されている、あるいは自主規制している罰ゲームがあるという方、スイッチをお願いします。

**福井**　9人の方が、禁止または自主規制している罰ゲームがあるということです。そうなると聞きたくなるのが人情ですが、具体的には何が禁止されているのでしょうか？

**坂本義幸（TBS）**　『リンカーン』のプロデューサーをやっています。1年ほど前だと思いますが、小学生たちの素朴な疑問に、浜田雅功さんをはじめとした芸人さんたちが答える「教えて浜ちゃん博士」というコーナーがありました。そのコーナーで、「ゴムパッチンのゴムはどこまで伸びるのか」という疑問に答え、緑山スタジオの広場で、ゴムをどんどん伸ばして、最終的に50メートルぐらいまで伸びたと思います。で、顔にバシーンとや

**～出席者一覧（敬称略）～**

**○司会・進行**

福井　謙二（フジテレビ）
大江麻理子（テレビ東京）

**○ゲスト**

吉岡　忍（BPO・放送倫理検証委員会委員）
水島　久光（〃　〃）

**○「バラエティー向上委員会」**

委員長　島田　昌幸（民放連・放送基準審議会放送倫理小委員会委員長（当時）／テレビ東京社長）

**【日本テレビ】**

鈴木　雅人／「笑点」「メレンゲの気持ち」
宮下　仁志／「ぐるぐるナインティナイン」「99プラス」
加藤幸二郎／「世界の果てまでイッテQ！」「ミリオンダイス」
毛利　忍／「一億人の大質問!?笑ってコラえて！」「AKBINGO！」
森實　陽三／「エンタの神様」「天才！志村どうぶつ園」
清水　星人／「天才！志村どうぶつ園」「魔女たちの22時」
松本　京子／「満天☆青空レストラン」「世界の果てまでイッテQ！」「ミリオンダイス　スクール革命」
江成　真二／「Music Lovers」「音楽戦士MUSIC FIGHTER」
田中　宏史／「行列のできる法律相談所」「しゃべくり007」「人生が変わる1分間の深イイ話」
上利　竜太／「カートゥンKAT−TUN」

って、現場は楽しく大笑いで、オンエアも終わりました。

その後、BPOの青少年委員会から、こっぴどくお叱りを受けまして、やり取りも何回かしましたが、制作側としては、そこまでBPOに言われちゃうと、「もうできないな」って防御本能で、「ゴムパッチンはやばいだろう」みたいな雰囲気があるのは事実です。

**福井**　50メートルぐらいの距離まで伸びた時に、ちょっとヒヤッとしませんでしたか？

**坂本（TBS）**　もちろんスタッフで何回もシミュレーションを重ねました。安全性を確認した上で、演者さんにやってもらう。そこの種明かしを見せちゃうと、たぶん面白くないので、本番だけを見せるわけです。本番1回だけ見たら、痛々しいと感じる視聴者も、当然いらっしゃるとは思います。

**大江**　もう1つうかがいたいのですが、PTAに嫌われたことがあるという方、スイッチをお願いします。……6人いらっしゃいますね。

**福井**　日本PTAが発表する「子どもに見せたくない番組」がありますね。その上位にランクされた番組でしょうか。どういうところがPTAに嫌われたのか、ちょっと吐露していただけますか。

**藤井智久（テレビ朝日）**　『ロンドンハーツ』を担当しています。ここ6年連続の1位を達成させていただきました（笑）。下品な言い回しが多いことや、「格付け」というコーナーがイジメにつながるというご指摘を受けています。

「格付け」は、10人の芸能人の方に関し、あるテーマでその方々の印象度――例えば、この人は性格が悪そうだとか、この男性と結婚したい――ということを一般視聴者の方にアンケートを取らせていただき、その順位を発表していく内容です。

当然、順位付けではありますが、長く見ていただくと、悪い順位だった人たちが、だんだん良くなったり、自分が周りからどう見られているのかを分かった上でそこを変えていく。つまり、自分が思ってる自分だけじゃなくて、周りが思っていることを聞くのも良いことなのかなって思っていただければ、ありがたいと考えています。

ある種、忸怩（じくじ）たる思いもありますが、常に注目され見ていただいているという部分はあるのかな、と思っています。

## 「嫌われる5つの瞬間」の真意

**福井**　BPOの「最近のテレビ・バラエティー番組に関する意見」の中で、「バラエティ

**【テレビ朝日】**
藤井　智久／「ロンドンハーツ」「シルシルミシル」「アメトーーク」
寺田　伸也／「いきなり！黄金伝説。」「雑学王」「天才をつくる！ガリレオ脳研」
中川圭一郎／「ビートたけしのTVタックル」
友寄　隆英／「いきなり！黄金伝説。」「お試しかっ！」
加地　倫三／「アメトーーク」「ロンドンハーツ」
奥田　創史／「SmaSTATION!!」「『ぷっ』すま」
濱崎　賢一／「ナニコレ珍百景」
遠藤由一郎／「Qさま!!」「お願い！ランキング」
丹羽　敦子／「池上彰の学べるニュース」「SmaSTATION!!」
米田　裕一／「いきなり！黄金伝説。」

**【TBSテレビ】**
合田　隆信／「ひみつの嵐ちゃん！」「さんまのスーパーからくりTV」
近藤　誠／「さんまのスーパーからくりTV」「関口宏の東京フレンドパークⅡ」
安田　淳／「リンカーン」「ザ・イロモネア」「オールスター感謝祭」
江藤　俊久／「さんまのスーパーからくりTV」「オールスター感謝祭」
中川　通成／「ザ・イロモネア」
大木真太郎／「うたばん」「ぴったんこカン・カン」「CDTV」
古谷　英一／「うたばん」
木田　将也／「関口宏の東京フレンドパークⅡ」
坂本　義幸／「リンカーン」
谷澤　美和／「中居正広の金曜日のスマたちへ」「ぴったんこカン・カン」

ーが嫌われる5つの瞬間」を指摘しています。

**大江**　「①下ネタ、②イジメや差別、③内輪話や仲間内のバカ騒ぎ、④制作の手の内がバレバレのもの、⑤生きることの基本を粗末に扱うこと」。

これらが「嫌われる5つの瞬間」ということです。

**福井**　吉岡さん、この5つの事象を説明していただけますでしょうか。

**吉岡**　下ネタというのがありますよね。それから、イジメや差別。内輪話や仲間内のバカ騒ぎっていうのは、タレントさん、芸人さんたちが、それこそカメラの前で大騒ぎしているのを映しているというもの。それから制作の手の内がバレバレのものは、例えばお客さんが全くいないのに、拍手の音だけ聞こえてくるような……これは作った映像だなということが分かるようなものですね。生きることの基本を粗末に扱うとは、食べ物を粗末に扱うとか、動物を虐待することです。

それから、もう1つ言えることは、画面の中でやっていることについて、視聴者がそれに乗れないということ。そこに隙間風が吹いているような、そんな感じのものがあるのかなっていうものです。

何百通という視聴者の意見を読みましたが、僕らは事例ごとに番組と対照して見た。それで感じたことですが、番組を全部見たら「こういう意見にはならないだろう」という場合がいくつかあった。その瞬間だけちょっと見て、「イジメにつながるからけしからん」とか「差別だ」と言っているのではないか。

そういう意味では、この中に、視聴者も勉強してほしいと思う人は絶対にいるでしょ。ボタン押してください。

**大江**　視聴者も勉強をしてほしいと思う方は37人です。

**水島**　ちゃんと見てほしいという気持ちは分かるけれど、そうじゃないのが現実なんですよ。仮に、「僕らがやっていることは正しくて、ちゃんと見てくれない視聴者が正しくない」と言ったところで、では他の世界で番組を作りますか？　という話になってしまう。やはり、この社会にきちんと位置づけられているテレビという仕組みの中で番組を作らなきゃいけないんじゃないですか？　その枠は外しちゃいけないと思う。

それともう1つ、「嫌われる5つの瞬間」を挙げたのは、こんなシーンを流していると、そこに「エッ？」という視聴者の反応が生まれるリスクがあることを指摘するためで、新聞などが書いているように、「この5つは駄目だ」と断定しているわけではないんです。あくまでも、この5つの点にいろんな問題が

**【テレビ東京】**
永田　浩一／「たけしのニッポンのミカタ！」「美の巨人たち」
岡田　英吉／「開運！なんでも鑑定団」
増田　君儀／「出没！アド街ック天国」
井関　勇人／「空から日本を見てみよう」「ソロモン流」
平山　大吾／「世界を変える100人の日本人 JAPAN☆ALL STARS」
伊藤　隆行／「やりすぎコージー」「モヤモヤさまぁ～ず2」「モヤモヤさまぁ～ず2」
小高　亮／「いい旅・夢気分」
園部雄一郎／「ピラメキーノ」「ゴッドタン」
佐久間宣行／「所さんの学校では教えてくれないそこんトコロ！」
工藤　里紗／「極嬢ヂカラ」

**【フジテレビ】**
小松　純也／「ごきげんよう」「爆笑！そっくりものまね紅白歌合戦スペシャル」「お笑い芸人歌がうまい王座決定戦スペシャル」「ネプリーグ」「エチカの鏡」「トリビアの泉」
宮道　治朗／「ホンマでっか!?TV」「はねるのトびら」
亀高美智子／「VS嵐」「HEY!HEY!HEY!」
近藤　真広／「人志松本の○○な話」
佐々木　将／「SMAP×SMAP」「チョナン・カン2」
黒木　彰一／「ペケポン」
石川　綾一／「笑っていいとも！」「オレワン」
金子　傑／「爆笑レッドカーペット」「爆笑レッドシアター」
藪木健太郎／「めちゃ2イケてるッ！」「1ばんスクラム!!」
中嶋　優一／

**【全国各局のバラエティー制作者の皆さん】**
**【バラエティーを応援してくださる視聴者の皆さん】**

現れてくるよと、ＢＰＯは現場に注意を喚起しているんですよ。

## テレビ局なら何でも許される？

**大江**　では、実際に視聴者の方はどう考えていらっしゃるのか、このあたりでうかがってみたいですね。

**福井**　本日は、前方の席に視聴者の方にお越しいただいております。ここまで制作者側の意見を聞いてきましたが、視聴者の皆さんのご意見はどうなんでしょうか。できれば挙手をお願いします。

**視聴者Ａ**　まずお聞きしたいのは、テレビ局だから何でも許されると思って、番組作りをしていないかということです。十数年前の話ですが、ゲームセンターで遊んでいたら、テレビの取材があって、明らかにマイクなどの機材が私が遊んでいる画面上にはみ出して邪魔されたんです。後ろの方にいるＡＤと思われる人からも全く謝罪がなく、そのままやり過ごされまして、非常に腹が立った思いがあります。そういう意味で今の質問をしました。

**藤井（テレビ朝日）**　「テレビ局だから何でも許される」などとは決して思っていません。なぜなら、許されていないからです。たぶんここにいる人間たちには、「許されていないこと」がいっぱいあると思うんですよ。

10年前のその出来事は、そういうことだったのかもしれませんが、今はもちろん取材をする時は必ずその場所の許可もいただきますし、そこにいらっしゃるお客さんの迷惑にならないように撮ります。皆さん方のお声は当然ＢＰＯからも、それぞれの局の視聴者センターなどからも上がってきます。それをきちんと自分たちの中で処理して、許される範囲の中で作っているつもりです。

**宮道治朗（フジテレビ）**　僕も、仕事ではなく普段街で遊んでいる時に、テレビクルーの撮影に出会ったりすると、ちょっと横柄だなと思うことは確かにあります。

でも、そこに「何をやっても許される」って気持ちは、確かにない。だけど、それぐらいテンパって、周りが見えなくなるぐらい大変なＡＤなどが、結果として周りに失礼な印象を与えてしまうことは、たくさんあると思います。それは気をつけなきゃいけない、根本的な思いとしては、全くないというふうに思います。

**加藤幸二郎（日本テレビ）**　確かに、ご指摘のような状況は分かります。当社では、一番注意しているところです。たった1人の行動で、テレビに対する見方が変わってしまったら、ということがありますから。

## 下ネタから学ぶことも

**福井**　他の視聴者の方はいかがでしょうか？

**視聴者Ｂ**　私は今、就職活動中で、バラエティー番組を作りたいと志しています。私は今のバラエティー番組が昔と比べてどうしても面白くなくなっていると感じていて、とても残念に思っています。もしも制作者の方々で同じ気持ちの方がいれば、その気持ちをお聞かせいただきたいと思います。

**福井**　では、昔と比べて最近のバラエティー番組が面白くないと思っている方、ボタンを押してください。

**大江**　13人いらっしゃいます。

**水島**　昔って、いつごろなんでしょう。番組の具体名を挙げてもらえますか。

**視聴者Ｂ**　例えば『とんねるずのみなさんのおかげです』です。制作費などの関係もあるのでしょうが、何をするにも派手だったところもありますし、あとは、こういう歳の男性なので、下ネタみたいなのを見て、学ぶところも多かったっていうのも正直なところです。（場内拍手）

**大江**　拍手が入っていますね。

**福井**　はい。初めて壇上と客席がつながりましたね。さて、昔と比べていかがですか。

**加地倫三（テレビ朝日）**　『ロンドンハーツ』と『アメトーーク』を担当しています。昔の方が面白かったと思うのは、個々の番組のクオリティーは編集のテクニックや演出方法などで確実に以前より上がっていると思う。一方、細かいマーケティングができているから、どうしても同じような番組が多くなっているというあたりに面白くないと感じる人が多いんじゃないかなと思います。

**吉岡**　テレビはどの局も、コンプライアンスだとか、イジメにつながるからとか、子どもがまねするからとか視聴者の意見もあったりして、自主規制とは言わないけれども、いろいろなことに気をつけるようになりましたね。そうなると、出演者の中で、例えば寄席だったらここまではできるけど、テレビはどうせダメだぜ、と自分で判断しちゃう。こういうことって感じたことはないですか？

「テレビはここまでしかできないよね」って判断してしまうことで、全体のボルテージが下がるようなことが今回の意見書で起こらないようにしたいと思っていたのですが、現場では実際どうなんでしょうか？

## 視聴者に〝明日の元気〟を！

**福井**　テレビの限界を考え過ぎた萎縮というものにもつながると思うんですが、吉岡さんのコメントに何かご意見をお願いします。

**合田隆信（TBS）**　「バラエティーが嫌われる5つの瞬間」に挙げられたことを続けていたら、番組は必ずつぶれます。不愉快だったら、番組はやっぱりなくなるんです。「面白くない」っていう意見は、僕らには一番こたえる。もちろん「不愉快だ」って言われるのも、これは考えなきゃいけない。単純なことです。「不愉快だ」「面白くない」……限界はそこにしかない。見ている人が不愉快か面白くないっていったらそれはダメだっていうことですから。でも、不愉快でなければ、面白ければ、基本的に限界はないはずなんですよね。

面白くない番組は視聴率が落ちて終わります。視聴者もスポンサーもそんなに甘くない。だから、BPOがそんなに言わなくても自然淘汰されるから大丈夫ですよって、思います。それよりも、個性のない番組がはびこっていくことの方が問題。でも、それがいろいろな制限がかけられるとか、お金がないっていう原因で起きているのだとしたら、悲しいことだし、僕らの努力も足りないって思います。それは結局、「視聴者をなめるな」ってことなんです。他の人気番組と何となく同じような感じで、と思って作っていたら、視聴率なんかとれないし、視聴者はそういう制作者の意図も見抜いていると思います。

**水島**　「5つの瞬間」にあることばかりやっていたら、番組はあっという間につぶれちゃうでしょうけれど、問題は番組単位で考えるべきことではない。そうこうしているうちに、テレビそのものが視聴者から見捨てられちゃうということが、今の世の中にとって大きな危機だと思う。

何だかんだ言って、テレビほど、人々とこの社会とを結びつけているメディアはなくて、ネットにそういう力があるかもしれないって皆さん言っているけれど、基本的に30センチの近さでカチカチ操作する姿勢は、人と人が向き合う距離感とは違う。テレビはさまざまな距離感を呑み込んで社会空間がそこにある雰囲気を作ってきた。だからこそいろんな意味でこのメディアをなくしちゃいけないっていう危機感がある。それは制作者の皆さんとも視聴者の皆さんとも共有したい感覚だと思う。

**小松純也（フジテレビ）**　番組が終わるということも事実だと思いますが、一方で、視聴者がそれを求めているからやっているというところも現実だと思います。番組を作る時に、世の中の人はどういうものを求めているのかということを真剣に考えます。その時に、こういうニュアンスのことをやれば見ている人

は喜び、視聴率がとれるからやろうという判断をしてしまうことがあります。

視聴者には番組を見て、明日の元気を持っていってもらいたい。ただ、その時に「自分はこれが正しいと思うんだ」って言いきれる思いで今まで番組を作ってきたつもりではいますが、果たしてどれだけの人が、番組を本当に面白いって気持ちで作っているのかに関しては、根深い問題があると思います。

どうしたらバラエティー番組を作る人間が主体性を持って作っていける環境になっていくのかということは、会社の偉い方にも考えてほしいし、視聴率のサンプルの取り方や視聴率の評価の仕方とか、根本的なところで考えないと、制作者たちの首がどんどん締まっていく……。そんな切ない状況にだけは、ならないようにと思います。

## 視聴率の先には笑顔がある

休憩をはさみ、資料として配付された「2009年の高視聴率番組50」のランキングを紹介しながら後半が始まった。

**福井**　ここでは視聴率をテーマに取り上げたいと思います。まず、この質問にまいりましょう。

**大江**　「視聴率を信用している」という方、スイッチオン。……38人いらっしゃいます。その反対も聞いてみましょう。「視聴率は信用ならない」と思っている方、スイッチをお願いします。……8人という結果になりました。

**福井**　番組作りの時、どうしても視聴率のことを念頭に置いてしまうという方、スイッチをどうぞ。

**大江**　43人いらっしゃいますね。

**福井**　では、これに関して、なぜ視聴率を意識しなければいけないのか。説明できる方、お願いします。

**安田淳（TBS）**　もちろん、いろいろな指標が考えられると思います。商業放送ですから、視聴率が悪ければ番組が終わってしまうので、現場の人間として気にするのは当たり前かなと思います。

先ほど指摘のあった点で言えば、つまらない番組だと言われると、当然、視聴率に反映すると思います。そういう意味では、「信用するしない」ということとは別に、それをベースにやっていかざるを得ないものじゃないかなと思います。

**水島**　だけど、視聴率の数字からはどんな人が見ているのか分からないじゃないですか。「全体として何％」と。それなのに、「これがビジネスルールになっているから、従わなきゃいけないって」なっているところに、本音で言えば、皆さんの忸怩たる思いがあるんじゃないかなと思うのですが。そのあたりは、どうなんでしょう。

**清水星人（日本テレビ）**　自分の番組の視聴率は、もちろんよく見ますが、やはり毎週見ていると、意外と正直だなと感じます。制作中、「うーん、ここはどうだろう？」って思ったところって、やっぱり数字が落ちるんです。だから、どちらかといえば、そこで一喜一憂するというより、毎週続いていくものなので、「ああ、見てる方はそう感じたんだな」「ここ、分からなかったんだな」といったことを把握するような感じで、視聴率を見ています。

**近藤真広（フジテレビ）**　われわれの目的は番組を作ることではない。そう思っています。では「なぜ作るのか」と言うと、それは作ったものを視聴者の皆さんに見ていただき、その上で喜んでもらいたい、楽しんでもらいたい、明るくなってもらいたい。だから作るんです。

その結果、大きな指標として視聴率という数字になって跳ね返ってくる。その時には、日本全国から回答を突きつけられたような気

持ちになりますから、良ければとてもうれしいし、悪ければ、「ここぞと思って作ったけれど、喜ばせられなかったんだな」「思いが届かなかったんだな」と。視聴率の先に、きっと視聴者の笑顔があるんだということを信じて、視聴率を追いかけているだけで、数字に追いまくられているということではないんです。

**吉岡**　番組コンクールの審査で年間120本近いドキュメンタリーを見ます。その経験で言えば、最近はドキュメンタリーの振りの部分でクライマックスシーンを使っちゃうものが多いんですよ。「こういうドキュメンタリーがあっていいのかよ」と思うんだけれど、たぶんそれは、「視聴者はちゃんと見ない」って制作者が思っているからだよね。

だから、そこに視聴率という問題と、視聴率の向こうにいる視聴者というものを、どう考えるのか。制作者は、視聴者の飽きっぽさみたいなものに、ちょっと辟易しているんじゃない？　そうでもない？

**大江**　では、聞いてみましょう。視聴者の飽きっぽさに、ちょっと辟易しているという方、スイッチをお願いします。……15人いらっしゃいます。

**岡田英吉（テレビ東京）**　確かに、芸人さんの短いネタが好まれる傾向にあるとか、衝撃映像が流行ったり、短い映像で一番すごいところだけをたくさん見せようという傾向が、最近あると思います。

僕は『日曜ビッグバラエティー』を担当しています。バラエティーとは銘打っていますが、人間ドキュメントの部分で、例えば大家族のようなものを、いろいろな切り口から取り上げる番組です。その人の一番面白いところにたどり着くまで、ドラマを展開していかなきゃいけないから、どうしても必要なんですが、そこの部分で数字が上がり切らない傾向がある、ということをヒシヒシと感じています。

**寺田伸也（テレビ朝日）**　バラエティー番組に関して言うと、制作スパン、オンエアスパンの短さが、視聴率に追われる原因かなと思います。視聴率ランキングの上位に挙がるドラマやスポーツは、半年なり、1クールなり、ある程度の準備期間があって臨めます。

しかし、バラエティーの場合、「来週どうするか」「今週はここが悪かったから、来週はこうしよう」みたいな感じで、しかもスペシャルを連発しなければならない状況もあるので、毎週の視聴率にどうしていいかっていうところは避けられないところがあるかと思います。

## 視聴者の感受性との真剣勝負

**福井**　そろそろ集約して、「見たいバラエティー」と「作りたいバラエティー」という方向にまとめてまいりたいと思います。

今日は視聴者の方がいらっしゃっていますので、視聴者の方がどんなバラエティー番組を見たいのか、アンケートをいただいています。紹介してもらいましょう。

**大江**　はい。73歳自営業の男性の方からの意見です。「生放送のバラエティー番組を見たい。生放送は出演者の本音が見られ、ぼかしや消音は興味が半減し、収録番組は時期がずれてしまっている。『笑っていいとも！』のような番組を夜の時間帯にやってほしい」ということです。

**福井**　『笑っていいとも！』を夜の時間帯に可能でしょうか？　担当者いらっしゃいますか？

**金子傑（フジテレビ）**　もちろんチャンスがあればやってみたいですね。ただ、それこそ視聴率が心配だなという。『笑っていいとも！』は、「お昼に芸人が出てきてガヤガヤ笑いをとるみたいなことって、やっていないじゃないか」。そんなことから始まったと聞いています。確かに、今、夜の時間帯の生放

送で、タモリさんやＳＭＡＰの中居さんが、僕らの言うことを聞かず、どんどんルールを変えたりしながら進める――そんなバラエティー番組ができたら幸せかなと思います。

**福井**　もう1つ、どうぞ。

**大江**　35歳、Webプランナーの女性の方の意見です。「笑って眠りにつける番組がいい」。これ、深いご意見ですね。

**視聴者C**　「笑って眠りたい」っていうのは、安心して笑って眠りたいと思っているわけではありません。私は、芸人さんがバスに閉じ込められて海に沈められるとか、そういう番組を見て育ちました。ですから、私としては、そういうのを見て、ああ面白かったって言って、疲れをとって眠りたいって毎日思っています。

　でも、そういう番組を見る機会が、今はほとんどないので、録画した番組を思い出しながら見たり、ＤＶＤを見たり……。今、そういう番組がなくて、とても残念だな、と。

**水島**　やっぱり見る人の気持ちとの勝負だと思うんですよ。だから先日の『めちゃ2イケてるッ！』で岡村隆史さんがセメントらしきものをかぶる場面も、ある見方からすればコンクリート詰め殺人に見えないかとか、檻に入れて人目にさらしながら街中を歩いているのはある種の監禁を想像させないか……など、ネガティブに感じだしたら、そういうことになる。でも映像表現には、えぐいものを日常にポンと置いてみると、えぐく見えなくなってくるという批判的な異化作用もある。

　だからこれは、そのような、ものを見る感受性っていうのが、僕ら視聴者の方にどれだけあるのかっていう問題でもある。かつて刺激的な番組で育てられた方は、やっぱりそれに即した豊かな感受性をお持ちなんでしょう。でも、今の世の中がそういった形で感受性を育む方向にどれだけ向いているのか、実はそのあたりがとても疑問なんです。

## ピンチをチャンスに！

**福井**　いよいよ大詰めを迎えます。最後に各局の50人の皆さんに、こちらに用意しました空欄を埋めていただこうと思っております。

**大江**　「私は、バラエティー番組□□ます。」ということで、ご自由に考えていただいて結構です。どうぞ皆さんお書きください。

**福井**　はい。どうやら書き終えられたようです。これを一人ひとりのバラエティー制作者宣言とさせていただこうと思います。バラエティー番組をどうするのか、どうしたいのか、どうすべきなのか。ではよろしいでしょうか、全員一斉に見せてください。……では、何人かにうかがってみましょう。

**工藤里紗（テレビ東京）**　「私はバラエティー番組でタイマンはります」と書きました。

　制作者それぞれが強い意志を持って、本気でバラエティーというものや視聴者の皆さん、そして自分のやりたいことと向き合っていれば――そう、「いつでもタイマンはりますよ」ぐらいの意気込みと熱があれば、それぞれがいい番組になると思う。自分はそういう気持ちで、どのジャンルの番組もやっていきたいと思っています。

**谷澤美和（ＴＢＳ）**　「私はバラエティー番組を作り続けて一人でも多くの人を幸せにします」と書きました。

　私が担当しているのは例えば『ぴったんこカン・カン』であるとか、普通に見ていただいて、「あんな場所に行ってみたい」と感じていただくような番組です。

　私の実体験ですが、出産の際に入院して、たまたま自分が『ぴったんこ』という番組を病室で横になりながら視聴者として見た時、周りの人たちも一緒に見てくれて、「この番組見ると元気になる」って言ってくださいました。私はバラエティー穏健派みたいな感じで、お年寄りや専業主婦の方々が見て、楽しくて幸せな気持ちになってくださるような番組をこれからも作っていきたいなと思ってい

ます。

**米田裕一（テレビ朝日）**　3年目でまだまだ若輩者ですが、「私はバラエティー番組を楽しみます」と書かせていただきました。

というのも、僕は入社してまだ3年。大学時代の友達と会う機会もありまして、「見たい番組と作りたい番組」みたいな話をすると、みんな、きょとんとしている。というのも、みんないろいろな会社で働いていますが、例えば商品を作っている人に置き換えると、「買いたいものと作りたいものどっちがいいか」なんて議論はないという。「買いたいものに決まっているだろ」って言われるんですね。

それを聞いた時にすごくドキッとして、でもドキッとしたのと同時に、今すごく素敵なことをやれているんだということも実感しました。せっかくそういう場所にいるので、それをしっかりと楽しむ、いいものを作って幸せになってもらいたいなと思って書きました。

**田中宏史（日本テレビ）**　僕は「バラエティー番組は、ピンチはチャンスだと思います」と書きました。

営業から異動して番組制作に携わっていますが、僕が現場に来た時にはもう、ある程度制約も多くて、今とあまり変わらない状況でした。そんな中でも別に、会社から「あれやっちゃダメ」「これやっちゃダメ」って言われたことも特にありませんが、テレビを取り巻く環境としては、たぶんピンチが多いんだろうなと。ネットもあればＤＶＤもあり、テレビ以外のエンターテインメントって多いと思うので、そこに勝っていくという意味では、逆にポジティブなことしかないなと思っています。テレビだけじゃなく、すべての業種で制約を受けているのが当たり前だと思うので、そういう時にこそ生まれるものって、きっと何かあるのかな、と。

**亀高美智子（フジテレビ）**　「私はバラエティー番組を楽しんでます」という個人的な感想を書いてしまいました。

今日いろいろお話を聞かせていただいて、視聴者の方も制作者も、喜怒哀楽は個々人で全く違うものだろうと思いました。17年間バラエティー番組をやってきて、笑いに正解はないと思っています。どれだけ現場が視聴者に向けた番組作りを楽しんでいるかということが、たぶん視聴者に一番伝わると思っています。

今後も、現場のスタッフみんなが楽しんでいること、そしてそれがきっと視聴者に伝わって、楽しんでくれていると思って番組作りをしていきたいなと思います。

## 自らの覚悟と確信で臨め

**福井**　吉岡さん、水島さん、今回の催しは初めての試みですが、最後に感想をお願いします。

**水島**　意見書を公表してから、「じゃあどこまでがＯＫなのか具体的に示してくれ」って質問をよくもらう。それは、その場その場でしっかり話し合って、自分たちの覚悟と確信の下で、基準を見い出すべきものでしょう。それをそもそも、人に答えを出してもらおうとする他律的な姿勢がすごく危険だなと思う。

ここに集まられている皆さんは、自信があって、それなりの思いもあると思います。でも、皆さんのチームの中にその気持ちが伝わっているか。まず、そこが大事なんじゃないか。実は、今日話されたようなことが、「分かっているだろう」ではなく、既に若い制作者には共有できないような時代にきているんです。バラエティー番組の制作とは、その中でどうやってリスクヘッジするかという切実な問題を抱え込んでいるんだと思います。

**吉岡**　バラエティー番組ってこんな真面目な人たちが作っていていいのかよ――と思うぐらい、皆さんは真面目な方々だと思う。

今日はあまり話題にならなかった、いわゆる情報バラエティー番組がありますね。2009年に総務省が行政指導した番組のうち、2つは情報バラエティーだったんですよ。こういう分野にも、行政指導が入ってくるんです。行政指導が入ること自体、僕はけしからんと思う。でも、今その仕組みの中にテレビ局があるってことも、また一方で間違いない事実です。

権力を監視するテレビ局が、そういう形で監視されることの異常さというものを、楽しく一生懸命視聴者に喜んでもらおうと思って番組を作っている人たちにも、常に自覚しておいていただきたいなと思いました。

意見書を出してから、皆さんとお話しする時はいつも、「突き詰めてしまえば、皆さんが作りたいものを作ってくださいよ」と言ってきたのですが、今日はちょっと意見を修正しようかなと思いました。

テレビって、何やかんや言っても一番大きなメディアですよね。これがあるから世の中1つにまとまっているようなところがあります。その力というのを、あんまり馬鹿にしないほうがいいと思う。この役割がなくなったら、この社会ってきっとバラバラになっちゃうと思う。だから、「自分たちの作りたいもの」っていうだけでなく、やっぱり「世の中に笑いを」「世の皆さんに喜んでいただきましょう」ってことが原点だということを、皆さんの話をうかがってあらためて感じました。

**福井**　お2人の言葉をもって締めとさせていただこうと思います。本日は会場と壇上の「バラエティー向上委員会」の皆さん、どうもありがとうございました。

※編集部注：誌面の都合で発言者すべての発言内容はご紹介できませんでした。


月刊
新聞研究
5月号　5月1日発行予定　定価840円

教育・教養事業の取り組み

◇朝日新聞社の教育・教養事業……坂本　弘子（朝日）
◇好調な毎日小学生新聞を中心に……小野田正利（毎日）
◇学生、社会人向けの事業展開……坂村　道生（日経）
◇地方紙の取り組みから……丸野　真司（熊本日日）
◇ワシントン・ポストの教育事業と収益性……津山　恵子（ジャーナリスト）

【バンクーバー五輪の報道から】
▼地下鉄サリン事件から15年……三木　修司（読売東京）／加茂　明（NHK）／佐藤　大吾（北海道）／三浦　好司（山陽）
▼JAL再建問題をどう報じたか……河原　理子（朝日東京）
▼横浜事件の再審訴訟を考える……木村　旬（毎日東京）
▼「サンデープロジェクト」の影響力……白取　祐司（北海道大）／森　暢平（成城大）

日本新聞協会
〒100-8543　東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル7F
電話　03（3591）4403
振替口座　00130-3-195998

特集 バラエティーなう

# テレビ・バラエティーはどこへ行く？

お笑い評論家・江戸川大学専任講師 西条 昇

さて、BPOの放送倫理検証委員会が出した「最近のテレビ・バラエティー番組に関する意見」を受けて、バラエティー番組が抱える問題点、これからの可能性とそのあり方を考えていこうというのが本稿の狙いである。

## 独自の発展を遂げたジャンル

以前から僕は、日本ほどバラエティー番組が好まれている国はほかにないのではないかと考えていた。

「いや、そんなことはない。現に、これだけ多くのバラエティーへの抗議が寄せられているではないか」とおっしゃる方もいるだろう。それは確かにそうなのだが、では、テレビ番組の中でバラエティーの占める割合が日本よりも高い国がほかにあるだろうか。

テレビに登場するお笑い芸人の数がこれだけ多い国も珍しいだろう。「リアクション芸人」や「ひな壇芸人」の存在も日本独自のものなのだ。

僕が教えている江戸川大学の中国人留学生は、来日して間もないころに日本のテレビを見て、あまりのバラエティーの多さと、それまで持っていた「日本人は真面目」というイメージとのギャップに、まず驚いたという。

意見書の「バラエティーって何だ？」という項では、「広辞苑」(第6版)から「落語・漫才・曲芸・歌舞など諸種の演芸をとりまぜた演芸会。また、その種の放送番組」という項目が紹介され、「いまどきこの例にあるような演芸だけで成り立っているバラエティー番組など、かえって珍しい」「バラエティーは出演者によっても、構成や演出の仕方によっても定義される番組スタイルということである」と書かれている。

もともと、バラエティーという芸能ジャンルはステージ・ショーの一種としてアメリカで成立したもので、フレッド・アステアとジュディ・ガーランドが主演した映画『イースター・パレード』(48年)で往年のバラエティーのステージの雰囲気を味わうことができる。現在も、ラスベガスではvarietyの頭文字からとった「V」という題名で、曲芸とマジックとお笑い芸などを並べて見せる形式のステージ・ショーが上演されている。日本でも、昭和初期の浅草や日比谷の劇場では「ヴァラエテー」といった表記でレヴューやコメディーとともに盛んに上演されていた。

日本にテレビが誕生してからは、アメリカの『ペリー・コモ・ショー』などの影響を受けて制作された『光子の窓』『シャボン玉ホリデー』『九ちゃん！』(以上、日本テレビ)、『夢であいましょう』(NHK)といった番組

は一般的に「バラエティー・ショー」と言われることが多かった。

最近のバラエティー番組はバラエティー・ショーという表現がニュアンス的にしっくりこないものが大半である。つまり、日本のバラエティー番組は、バラエティー・ショーという表現から「ショー」が取れ、単にバラエティーと言われるようになった瞬間から独自の発達を遂げたと言えるのではないか。

良くも悪くも、現在の日本のバラエティーは、われわれ日本人の持つ気質や好みを反映して成立したものであることは間違いないと思われるのだ。

## 「テレビ芸」がお笑いを変えた

そんなことを考えていたら、BPOの意見書を受けた二つの番組がこの春に相次いで放送された。『めちゃ2イケてるッ!』の「プロフェッショナル　めちゃイケの流儀　超緊急スペシャル」（2月27日放送）と『悪いのはみんな萩本欽一である』（3月27日放送）。どちらも制作はフジテレビである。

意見書では、バラエティーに対する苦情や抗議を、①下ネタ、②イジメや差別、③内輪話や仲間内のバカ騒ぎ、④制作の手の内がバレバレのもの、⑤生きることの基本を粗末に扱うこと、という5つに分類しているが、このうち②と③の具体例として『めちゃイケ』に対するものが（番組名こそ書かれていないものの）挙げられていた。

これらに対する一種の回答として作られたのが、前者の「超緊急スペシャル」だった。意見書にある具体例を紹介しつつ、どうしたらもっと安全に面白くできるかをナインティナインの岡村隆史が番組スタッフと相談しながらテストを繰り返していく。手錠をかけて動けなくなったバナナマンの日村勇紀を熱湯に突き落とした企画への抗議を受けて、岡村が両足をタオルで結んだり、寝袋に全身を入れた状態のままで熱湯に突き落とされたり。バレンタインデーにちなんで溶かしたチョコを加藤浩次と鈴木紗理奈の頭からかけて「チョコフォンデュ」にした企画への抗議に対して、岡村がミキサー車から流されるドロドロの生コンクリートを大量に浴びて「生コンクリートフォンデュ」状態になったり。

意見書の「私たちは、バラエティーが萎縮することを望まない」という一文を受け止めた岡村が、ことあるごとにスタッフに「萎縮すんなよ!」と言いながら、自ら何度もヒドイ目に遭う様子が笑えた。一方で、「張り扇で叩かれるのを、イジメを助長してるみたいに言われるけど、そうじゃないワケ。ただ、学校でイジメられている子が、俺らが頭叩かれるのを見て笑ってくれたら、それでいいワケ」と熱く語る岡村の表情も、ひときわ印象に残った。

寝袋に入ったまま熱湯に突き落とされたり、頭からコンクリート液を浴びたりといった笑いは、スラップスティック・コメディー（＝ドタバタ喜劇）の笑いに通じるものがある。そのルーツはチャップリンやキートンやローレル＆ハーディーらの無声喜劇映画にまでさかのぼることができる。彼らは皆、誰よりもヒドイ目に遭うことで笑いを誘っていた。警官隊に扮した数人のコメディアンが走る車の後部にとり付けられたロープにつかまり、うつ伏せのまま地面を引きずられ、しまいに電柱に全員がグルグルと巻き付いてしまう短編喜劇映画の一場面などは、まるで漫画を見ているような面白さがあったものだ。

ザ・ドリフターズの『8時だョ!全員集合』（TBS）のコントもスラップスティックな笑いを狙ったものだったが、加藤茶の「チョットだけよ」やウンコの作り物などの下ネタ、食べ物を投げ合うギャグなどに多くの苦情が寄せられた話はよく聞くものの、志村けんが大量の水をかぶったり、粉まみれになったり、いかりや長介にメガホンで叩かれたりするギャグに対して「イジメを助長する」との抗議

があったという話はあまり聞かない。

人によってイジメを連想させる「リアクション芸」や「被虐芸」がいつから始まったかと言えば、『金曜10時！うわさのチャンネル!!』（日本テレビ）のせんだみつおからではなかったか。プロレスラーのザ・デストロイヤーに4の字固めをかけられたせんだが涙を流して本気で痛がっているように見せ、共演の和田アキ子らがその様子を見て大笑いするという構図も生まれた。その後、コントやコメディーという枠を外して、バラエティーの企画としてタレント本人のキャラのままでもヒドイ目に遭ったり遭わせたりすることが主流となり、イジメに関する視聴者の苦情が増えたように思う。

一方の『悪いのはみんな萩本欽一である』は、『空気人形』『誰も知らない』などで知られる是枝裕和監督が演出を担当。バラエティーに「イジメ」や「素人いじり」などの要素を持ち込んだ元凶を萩本としたうえで、被告人・萩本をめぐる法廷劇という設定でバラエティーとは何かを探っていく異色作であった。

『24時間テレビ』（日本テレビ）のメインパーソナリティーを務めたころの萩本には、世間的に「いい人」とのレッテルが貼られていたから、「イジメ」の笑いとすぐに結びつかない人も多いだろう。しかし、無茶な注文をアドリブでしつこく連発することで相棒の坂上二郎を困らせ、時には飛び蹴りをくらわせるコント55号時代の若き日の萩本の姿を知る人なら納得するに違いない。坂上が本当に困ったり疲れたりしているように見せるのが抜群に上手かった分、余計に当時の萩本の芸風からはサディスティックな匂いが漂っていた。

後に、若手芸人に無茶な注文を出して過酷な旅をさせる企画などで一世を風靡した『電波少年』シリーズ（日本テレビ）のプロデューサーを務めた日本テレビの土屋敏男氏は、かつて萩本の番組のディレクターを担当したころにそのサディスティックな笑いの作り方から大きな影響を受けたという。

下ネタに関しても、萩本は女性タレントを野球拳で脱がせていく『コント55号の裏番組をぶっとばせ！』（日本テレビ）という大きな足跡を残している。

また、素人いじりを多用した一連の〝欽ちゃん番組〟で萩本は独自の「テレビ芸」を確立した。ここでいう「テレビ芸」とは、本来はプロの作り手や演じ手による「表現としての笑い」を、視聴者の生活に身近な「日常としての笑い」の体裁で仕立て直し、極めてノンフィクション的に見せていく手法のことである。思えば、バラエティー・ショーから「ショー」という言葉が取れて、単にバラエティーと呼ばれるのにふさわしい番組が増えるのも、そのころからであった。

そういった意味で、『悪いのはみんな萩本欽一である』という番組タイトルに倣って「悪いのはみんなフジテレビである」と言うことも可能だろう。『欽ちゃんのドンとやってみよう！』で萩本の「テレビ芸」確立の場を与えたのも、『笑ってる場合ですよ！』や『笑っていいとも！』で「日常としての笑い」を大胆に取り入れたのも、『オレたちひょうきん族』でのディレクターの出演や芸人同士の暴露合戦といった楽屋オチの連発で意見書にある「内輪話や仲間内のバカ騒ぎ」の笑いを作るキッカケも、すべてフジテレビなのだ。さらに言うならば、「楽しくなければテレビじゃない！」をキャッチフレーズに、情報番組、音楽、スポーツ、ドラマに至るまでバラエティー化を推し進めたのも、同社であった。

今回、BPOの意見書に素早く対応して作られた二つの番組がともにフジテレビ制作だったこと、そして、ともに優れた意欲作であったことに、同局のバラエティー作りにおけるプライドと意地を感じることができた。

## 日本人はバラエティーが大好き

昨今の「コスト削減」と「コンプライアン

ス強化」により、バラエティー作りにおいて、制約がますます多くなっているのは確かである。では、制約が増えれば面白い番組は作りにくくなるかと言えば、必ずしもそうとも限らないと思うのだ。

日本の笑いの芸能は、日中戦争から太平洋戦争を経て終戦に至るまでの間、公権力から厳しい制約を受け続けていた。昭和初頭にエノケン（榎本健一）や古川ロッパといった大スターを輩出した浅草レヴューも、検閲制度などにより、コメディアンにとって最大の武器であるアドリブや時事諷刺、ナンセンスなドタバタ喜劇、レヴューに必要不可欠なアメリカ音楽の演奏などを次々に禁じられ、戦争協力劇の上演を強いられた。そんな状況下で、劇作家の菊田一夫が執筆した『ロッパ若し戦はば』（37年）と『ロッパと兵隊』（40年）は、戦争協力劇という枠を借りつつ、その時代の新しい喜劇のあり方を示した傑作であったと伝えられている。そこには菊田やロッパのプライドと意地があったのだろう。

BPOの意見書の「おわりに――バラエティーに新しい力と魅力を」では、「制作者としての内的必然性が伝わってくるバラエティーが見たい」と制作者へのエールが贈られると同時に、「ところが、いわば『当て逃げ』のような粗雑なネタ、『その場の軽いノリ』の悪ふざけを寄せ集めて作ったバラエティーがいささか目立つのではないだろうか」との現状への問題提起がなされている。

ここ数年のバラエティーは、多くの芸人を集めて彼らに何かテーマを与えてしゃべらせたり、芸をさせたりという形式のものが主流であり、この春の特番もゴールデンタイムから深夜枠まで、その種のものがとにかく多かった。中には『人志松本のすべらない話』（フジテレビ）や『アメトーーク』（テレビ朝日）といったバラエティー史に残る人気番組もあるが、これだけ同工異曲のものが続くと、さすがに他の形式のバラエティーの出現を期待したくなる。

全体的に、先に挙げたような往年のバラエティーの傑作と比べると、かなり小粒な印象のものが多いようにも感じる。

それを制約のせいにはしてもらいたくない。

3月11日に民放連の主催で行われたシンポジウム「バラエティー向上委員会」では在京民放5局の制作者が登壇し、「意見書を読んだか」との問いに48人が読んだと回答。「意見書をうっとうしいと思うか」という問いに対しては22人がそう思うと答えた。これを制約ととらえれば確かにうっとうしいのかもしれないが、ここは制作者へのエールと受け取って、真摯にバラエティーというものを見つめ直す一つの機会にしてもらいたいものだ。

地デジへの完全移行を来年に控える一方で、全体的な視聴者のテレビ離れが懸念される今だからこそ、その必要があるのではないか。何だかんだ言っても、日本人の大半はバラエティー番組が大好きなのだから、その人たちに「バラエティー離れ」をさせないような番組作りを期待したい。

意見書の文体やたとえ話の表現に関しては好みも分かれるところだろうが、要所要所で言わんとしていることは基本的に間違っていないと思う。

「私たちは、バラエティー制作に精魂をこめる制作者たちが登場し、新しい力と魅力にあふれたバラエティーをたくさん見せてくれる日を待っている」――全くの同感である。

（さいじょう・のぼる）1964年生まれ。16歳で三遊亭円歌に入門。その後、落語を辞め放送作家に転身。お笑い雑誌『AJAPA』の監修・製作総指揮を務めた。お笑い、テレビ、メディア、ステージ・ショーに関する連載執筆多数。笑いと健康学会理事。民放連賞中央審査員。主な著書に『ニッポンの爆笑王100』（白泉社）、『東京コメディアンの逆襲』（光文社文庫）、『ジャニーズお笑い進化論』（大和書房）など。

特集 バラエティーなう

# 〈お笑い〉の未来は いつだって明るい！

放送作家・ライター 高橋 洋二

私は放送作家業とライター業の兼業文筆家生活を送って28年、という者でございます。例えばある日の午後にはバラエティー番組用に〈豆まき〉が設定のコント台本を書き、深夜に文芸誌の連載コラム用に原稿を書くという日々を送っています。

また、キャリアの初期からテレビ誌で、他人様の作ったテレビ番組をネタにしたコラム連載を長く持っていたりして、お前はバラエティーを作るのか観るのかどっちが仕事なんだ!? と問われれば、どっちもです……と答えるのかなぁという立場ですかね。

しかし、一番はっきりしているのは子どものころから現在まで、ずーっとバラエティーは大好きで観ているってことです。

これは皆さんも同様でしょう。「皆さん」というのは放送局で働くあなたのことです。業界誌に文章を書くのは面白いもので読者の顔が明確に想像できてしまいます。

さて、本稿の執筆依頼を受け、編集担当者からBPO・放送倫理検証委員会「最近のテレビ・バラエティー番組に関する意見」という意見書、さらには3月11日に開かれた公開シンポジウム「バラエティー向上委員会」の速記録を送っていただきました。特にシンポジウムの方は発言者の中にかつて仕事をご一緒した方も少なからずいて、「○○さんはあえてガチでいってて頼もしいなぁ」とか「△△さんは△△さんらしいスベリ方をしているなぁ」などなど、第三者的立場といいますか見物人のような気持ちで読んでいたのですが、途中から発言者一人ひとりの意見に「よく言った！」とか「大変だなぁ…」と、どんどん引き込まれていき、しまいには不意にちょっと涙ぐんじゃったりしながら（老化現象かしら）それでもしっかり読みました。

自分としては珍しく今回の文章を「です」「ます」調で書いているのは、今、苦境に立つ同業者に向かって「この番組のあり方は○○である」みたいな物言いは、なんか違うんじゃないかと思ったことによるものです。論評するより熱い私信を送りたい、の気持ちを文体にダイレクトに表すことにしました。

だからと言って「なあなあの文章」を書くわけではありません。「なあなあ」をはるかに超えた、「ハイパー全肯定」でいってみようということであります。

これはつまり、単純な二者択一を行ったに過ぎないことで、「どうなんだ今のバラエティーは」と外から言われている現状に対し、「こういうダメなところがあるからダメなんだな」というある意味の正論、逆に「とは言うものの優れている部分もあります」という、こちらも正論。普通はこの両方をうまいこと

整えてちゃんとした論考になるのでしょうが、あえて後者のみの目線で、しかも言われた方も「え？　そこまで？」というくらい、今のバラエティーのこと、今後のことについていかに素晴らしいことになっているのか、という実験的文章を、今から死ぬ気で書きます。

## 「笑いは常に進化している」

この言葉は爆笑問題の太田光さんが「たけしさんも言っていたんだけど」と前置きして言った言葉で、私もそのとおりだなあと思っています。私なりにもう少し説明を加えると、人は何か面白いことに直面して思わず笑った時、次に同じレベルの面白いことに対しては笑顔でうなづくだけという反応になりますね。その人が次に笑い声を上げる時は、さらにレベルアップした面白いことに直面した時のみ、となります。単純なこのワンセットが、日々繰り返され、時にレベルアップの度合いの修整や、その場の状況判断を加えられながら、〈笑い〉とは常に、どんどん面白くなってしまうものなのです。

ただし、この幸福なサイクルは〈笑い〉の送り手と受け手の両者ともがスマートな関係にある時のみ機能すると私は感じます。

このスマートな関係を成立させなくする要因もさまざまに存在します。具体的に挙げると、レベル2ぐらいの〈笑い〉をあたかも〈レベル5〉であるかのように盛った演出などですよね。実はさして面白くない出演者が、面白い人として番組に出ていることも同様で、はっきり言って昔はこのパターンが本当に多かった。過去形にしたのは、世紀をまたいだころからでしょうか。テレビバラエティーの中にいる人の〈まっとうに面白い人の割合〉が急激に上がりました。なぜだか急に。

1990年代のなかばに放送された『ボキャブラ天国』シリーズ（フジテレビ）は、私も参加していたからここに取り上げるわけではありませんが、関東の芸能プロダクション所属の芸人さんたちをひとつのぶ厚い一枚岩に成型しました。当初はもともと一匹狼的なメンタリティの持ち主が多かった彼らですが、プロダクションを越えた横の連帯を持つことが「何かとても有効な感じ」につながり、いわゆる〈ボキャブラ世代〉が誕生しました。

98年に爆笑問題、ネプチューンがブレイク、他のメンバーも次々とブレイクするんだろうなと思っていたら、3年ほど事態はそのままで推移、天の配剤なのか、この溜めのような3年あまりがあって、海砂利水魚（現・くりぃむしちゅー）や土田晃之さん、東貴博さんのブレイク後のありようをさらに盤石なものにしているように感じます。

このテレビ朝日『銭形金太郎』のスタートに象徴される、制作者の「本当に今面白いと思える出演者ばかりで番組を作りたい」という革命的な、それでいて至極まっとうな熱意が、各局のバラエティーの現場で同時発生的に起きたのが2001年～02年でしたね。吉本興業の「M－1グランプリ」（朝日放送）も01年にスタートしました。フジテレビの『はねるのトびら』には業界内外のお笑い好きが皆ド胆を抜かれました。なんだかその当時は毎日毎日が右を見ても左を見てもテレビが「面白いはOKなんだ」の信念の下、それまでくすぶっていた若手から中堅の芸人さんを中央に置いた良質なバラエティーが量産されました。

私は視聴者としても番組構成者としても〈笑い至上主義者〉でありまして、そんな人間はこの業界ではマイナーなのかな、なんて思っていましたが、この時期の大変革でそんな考えは吹き飛びましたね。なんだ、みんなも〈笑い至上主義者〉だったんだ、と。

「笑いは常に進化している」この言葉を頭と体で理解している制作者と出演者が、スマートな視聴者にスマートなバラエティー番組を提供する雛型がこの時点で各局にいくつも誕生した印象です。本当にこの時の幸福感は

筆舌に尽くしがたい。なんだか私ひとりが大声で「バラエティー！　偉い！」と行進しているやに見えるかも知れませんが、どうやら日本人の10代から40代、50代以上も入るでしょうか、かなりの割合の人々が、この時期にバラエティーをいったん信用したのではないかと考えます。

皆さんは国民からいったん信用されていますと。これを言いたかった。

大学野球の選手名鑑などでは各選手のプロフィール欄に「好きなテレビ番組」という項目があって、『リンカーン』（TBS）『爆笑レッドカーペット』（フジテレビ）といったバラエティーの番組名がずらりと並んでいます。プロ野球選手の多くは春のキャンプに『リチャードホール』（フジテレビ）や『アメトーーク』（テレビ朝日）のDVDを持ち込んでいるのも事実です。

イチロー選手は09年の正月放送の密着番組のロケの中で「惚れてまうやろー！」と、いま日本で人気のWエンジンの定番ギャグを発することにより、「日本のことわかってるんですよ感」をアピールした。私の周りのことで言いますと、この10年、私は何人かと会食したりする時、ごく自然に「今、芸人さんで誰が好き？」という話題で盛り上がることになっています。

もちろん、バラエティー界にとってこの10年、いいことばかりではなく、視聴率は良くても制作費のかかる番組が終了するようにもなりました。私はこの世の終わりかと思いましたが、後続の『お願い！ランキング』（テレビ朝日）が超低予算ならではの作りで、それなりに高いクオリティの番組になっていることに驚きました。どんな条件下でも面白い番組を作ってやるという迫力を感じましたね。

## 「第三の才能」に注目

さて、この10年バラエティー界は優れた芸人たちの力量を制作者が信頼し、お互いを刺激し合いながら良質な作品を作ってきました。そんな中、いくつかのいわゆるネタ番組が終了しましたが、私には個々の番組の耐用年数が経過して使命をまっとうしてのことと映りました。では、今後のバラエティーが新しく取り入れるべき使命は何か。

それはズバリ、「第三の才能」の取り込みです。

私は長年にわたってAMラジオの現場に携わっていまして、それは取りも直さず、リスナーが番組に書いてよこすネタハガキ（今はネタメール）をずーっと見てきたということです。20年前の文化放送『さだまさしのセイ！ヤング』のハガキのクオリティは実に高いものでした。その後はTBSラジオの『JUNK』の枠で火曜日の爆笑問題、木曜日のアンタッチャブルとご一緒してきたのですが、こちらに寄せられるネタメールのクオリティがもの凄いことになっています。かつてのものは「一般人なりの優れた視点による投稿」でしたが、最近のリスナーは「プロのコント作家の即戦力として通用するコント台本」が書けるようになっているのです。特に木曜JUNK『アンタッチャブルのシカゴマンゴ』では、ツッコミの柴田英嗣が、まず自分が発したいツッコミせりふをお題としてリスナーに振って、そのツッコミに合うボケを送ってくるという「ツッコミ先行宣言」というコーナーが存在しました。毎週お送りしているうちにリスナーの考えるボケがどんどん長く、つまりは漫才風やりとりそのものになってきて、さらには勝手に「さまぁ～ず風」や「ブラックマヨネーズ風」の一本ネタをオリジナルで書いて送ってくるようになったのです。

このコーナーの勢いを利用して「他力本願ライブ」なるものも有料で開催しました。アンタッチャブル、東京03、ビーグル38、おぎやはぎ、BOOMERといった芸人さんに向けて、漫才台本、コント台本をリスナーから募集、本人たちが「これいけるな」と思った

台本どおりのネタを300人の客前で披露したのですが、滅多にないくらいの爆笑と幸福感に満ちたライブとなりました。アンタッチャブルの『JUNK』は終了してしまいましたが、番組が育てた有能なリスナーは残せました。最終回の放送終了後、彼らはTBSラジオに集合して山崎弘也に直接、別れの挨拶を告げにやって来ました。その中には「4月より某プロダクションの預かりとなり、放送作家の道を選びました」とか「常連同志でコンビを組んで芸人を目指すことにしました」という者もいて山崎弘也も喜んでいたようです。

テレビバラエティーの制作者の皆さんにお願いしたいのは、ぜひこれからAMラジオを聴いてみてください、ということです。アンタッチャブルが育てた強力リスナーたちも、他の曜日の『JUNK』にネタメールを送り続けることでしょう。ぜひ彼らの名前とネタに触れてみてください。「第三の才能」とは彼らのように優れた視聴者やリスナーの才能のことであります。NHKの『着信御礼！ケータイ大喜利』は、この流れにいち早く目を付けたものでしたが、民放でもこの〈笑いの才能の隠れた油田〉を何とか活かすことはできないものかと考えます。

お金がないバラエティーが、ネタは無尽蔵に書ける才能はあるけれどお金がない若者たちと組んで、WIN-WINの関係を築く、夢のような未来が私には見えます。

## タフな作り手たちに期待

なんかムキになって、バラエティーのやっていることは間違っていませんよ！　とか未来は明るいですよ！　と唱えるように見えたかもしれませんが、実は今回私が書いたことぐらい、とっくに感じていたよ、という方も多いだろうと思っています。この原稿依頼を受けたころから、身近にいる若い放送作家などに、あなたの周りの雰囲気はどうなっている？　と尋ねたところ「なぜか暗くはないですね」「視聴率のことばかり今まで気にしていましたけど、良くても終わる番組があるんだってことで、じゃあ面白くすることだけを考えればいいんだ、となぜか楽な気持ちになりました」といった答えが返ってきました。バラエティーの作り手って本当にタフなんだなと思いますね。バカなんじゃないかというくらい。私も含めて。

さて、今後もバラエティーは大なり小なりのクレームを受け続けることでしょう。どんなことがあっても「何だか楽しそうな様子」を見せ続けていくのが宿命なわけですからね。そりゃ見てるだけで癪に障る人はいるでしょう。そのこととも関連しますが、最近ずーっと気になってることがありまして、それは「面白いことが嫌いな人はこんな世の中でどうやって暮らしているのだろう？」という疑問です。本稿で〈笑い〉がみんな大好きでヨカッター！　みたいなことを書きましたが、実際の話、全員が〈笑い〉が好きなわけありませんよねぇ。私のような者がいれば当然、真逆の人もいるわけで、「とにかく笑ったり笑わせたりすることがよくわからない人」が絶対にいるはずで、世の中が、こんなにかつてないくらい「おもしろ」をあらゆる場所や時間で皆が共有している中、〈非・笑い〉の人の〈非〉加減は相当なことになっているはずだと。いつかそういう人を番組で真面目に取り上げてみてはいかがでしょうか。私は観てみたいです。面白いことが大っ嫌いな人。

なんでしょうか、この結論は。

（たかはし・ようじ）　1961年生まれ。84年『吉田照美のてるてるワイド』（文化放送）で放送作家デビュー。以後多くのテレビ・ラジオ番組の構成に携わる。またWAHAHA本舗プロデュース公演、タイタンライブ等の舞台の作・演出も手がけ、エッセイストとしても活動。著書は『10点さしあげる』、『ヴィンテージ・ギャグの世界』（ナンシー関と共編著）、『オールバックの放送作家――その生活と意見――』など。

特集 バラエティーなう

# BPO意見書はどう受けとめられたか

――関連機関の公開セミナーなどから

「制作者の意欲を高め、番組の面白さ・愉しさとともに鋭さ・深さを追求するにはどうしたらよいかを、局を超え、系列を超え、あるいは民放かNHKかの相違を超え、放送界全体で議論・討議する場がいまこそ必要とされているのである」

BPO・放送倫理検証委員会の「最近のテレビ・バラエティー番組に関する意見」（2009年11月17日）は、こう提言する。これを受け、各社でもさまざまなレベルで関係者による議論が繰り返されたはずだ。今号の巻頭に採録した「バラエティー向上委員会」も、その一環だ。また、西条昇氏の論考で紹介されたように、フジテレビは同意見に対する考えを「番組」の形で視聴者に直接、問いかけた。まさに、こうした目に見える取り組みこそBPOが企図したものだろう。

前記の「向上委員会」のほか、今回の意見書をテーマに関係者が公開の場で議論する場に立ち会うことができた。東京地区マスコミ倫理懇談会の月例会「鼎談　バラエティー番組と倫理」（09年12月24日、東京・日本プレスセンター）と、近畿民放19社主催の第5回放送倫理セミナー「がんばれ放送人！BPO意見書を巡って」（10年3月5日、大阪・関西テレビ「なんでもアリーナ」）の二つだ。その概要を、以下に簡単に紹介したい。

## 閉塞状況をどう打破するか

マスコミ倫理懇談会の鼎談は、放送倫理検証委員会委員の水島久光氏（東海大学文学部教授）と、『進め！電波少年』などのプロデューサーとして知られる土屋敏男氏（日本テレビ）、『M−1グランプリ』などを手がけた森本茂樹氏（朝日放送）の3人で行われた。

まず、水島氏が「〝バラエティーの社会的使命は何か〟をめぐって、開かれた議論を喚起したかった」と意見書の趣旨を説明。これに対し、「現場は窒息寸前。なぜそうなって、どうしたら抜け出せるかのヒントとして、すべてのバラエティー制作者に読ませたい」（土屋氏）、「報道もバラエティーも高い倫理観を持つべき点は同じ。今回の意見書でBPOと放送局の距離が近くなった」（森本氏）と意見書の意義を評価した。

一方、「バラエティーは〝くだらない〟と言われることが勲章。『公共の電波の私物化』『情けない』といった常套句や視聴者からの指摘を類型化した部分は現場の萎縮を招きかねない」（土屋氏）との注文も。バラエティーの現状については、「番組のメイン司会者が20年前とほとんど変わっていないことも、閉塞感や既視感につながっている。新たな人

材の発掘や、制作者の意識改革も必要」（森本氏）、「作り手が視聴者を見下したような番組は、必ず淘汰される。現場の活性化とノウハウの継承を業界全体で考えていくべき」（土屋氏）といった認識が示された。

## 現場の活力を取り戻すために

近畿地区の放送関係者を対象とした第5回「放送倫理セミナー」は、放送倫理検証委員会委員の吉岡忍氏（ノンフィクション作家）が意見書発表に至る背景を講演。「テレビ固有の豊かなバラエティー文化を萎縮させないためにも、現場に緩みがあってはいけない」と力説した。

続くパネルディスカッションは吉岡氏に加え、在阪テレビ5社のバラエティー担当プロデューサーが登壇。フリーアナウンサーの宮根誠司氏の司会で進んだ。BPOの意見書に対しては、「足元を見つめる契機となった」との共通認識の一方、「下ネタ」「イジメや差別」「内輪話や仲間内の手の内がバレバレのもの」など視聴者の意見を5つに類型化した指摘に対しては、「番組全体を通した作り手のこだわりもある。一部分を取り出しての指摘は残念」（関西テレビ・杉浦史明氏）、「どつき（キツい突っ込み）に象徴される関西のお笑いは、市民との信頼関係に根ざして育まれてきた」（テレビ大阪・徳岡敦朗氏）などの違和感も示された。これに対して、吉岡氏は「べからず集ではない。下ネタやイジメが必要なときは、作り手が信念を持って視聴者に正面から説明する覚悟が必要」と応じた。

宮根氏は「昨今の風潮の背景に、お笑いのパターンが出尽くしたこともあるのではないか」と提起。「10年以上前にも同じ指摘があった。まったく新しいものは出てこない。しかし、かつての人気パターンを現代流に蘇らせるのも制作者の腕の見せどころ」（読売テレビ・武野一起氏）、「人間の本質に基づく笑いは決して古びない。しかし、際どい線までいかねば笑いはとれない。危険度が高いだけに、作り手の誇りと矜持（きょうじ）が試される」（朝日放送・松本修氏）との考えが示された。

また、「いまのテレビはかつてのような〝娯楽の王様〟の地位から外れ、バッシングをはねのける力も弱まっている。視聴率追求という足かせから脱却し、自由な発想や番組作りをすべき時期にある」（毎日放送・浜田尊弘氏）との指摘があった。

（本誌編集長・西野輝彦）


調査情報

2010 5-6 790円
（752円＋税5%）

TBS
東京都港区赤坂5-5-9-7F
電話：03-3586-6003

特集1
スポーツ番組は、やっぱり強い！
スポーツ中継――恩恵と違和
視聴率が示すコンテンツ・パワー
後藤正治　渡辺久哲
テレビ観戦、私の見方
玉木正之◎竹田恆和◎中野 翠◎平出 隆
二宮清純◎長田渚左◎やくみつる
高橋源一郎◎吉永みち子◎蓮實重彦
世界最大のイベントから目が離せない！　鈴木健司
冬の競技の感動をいかに伝えたか　刈屋富士雄、小笠原 亘

特集2
70年代から見えてくるもの②　72〜73年
田中角栄　坪内祐三◎わたしたちのライ麦畑　落合恵子◎酒井政利氏インタビュー◎『日本沈没』　樋口尚文
あさま山荘事件　竹馬伸朗
『月刊ぴあ』創刊　矢内 廣